

**□質問**

I ペテロ 3 : 19 には、キリストが十字架の死から復活までの間、よみに下っておられたときに、よみに捕らわれていた霊たちに、みことばを語られた、とあります。また、I コリント 15 : 29 には、福音を聞かずに死んだ人の救いのために、今生きている信者が代わりに洗礼を受ける、とあります。信仰を持たずに死んでも、死後に救いを受けることはできるのでしょうか？

I ペテロ 3 : 19 その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行って、みことばを語られたのです。 (新改訳 1970 年)

I コリ 15 : 29 そうでなかったら、死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか。 (新改訳 2017)

**□回答**

信仰を持たずに死んだら、もはや死後に救いを受けるチャンスはありません。それは、聖書の多くの箇所にも裏付けられた、主要で基本的な教理のひとつです。

しかし、質問にあるような一部の箇所を根拠に、死後にも救いを受けるチャンスがある、と考える人々があります。人が救いを受けるチャンスは、生きているうちを 1 回目とするなら、死んでから 2 回目もある、と主張することから、そのような主張は、「セカンド・チャンス論」と呼ばれます。

**□ I ペテロ 3 : 19 について**

I ペテロ 3 : 19 を根拠にセカンド・チャンスがあるかのように考えられてしまったのは、3つの原因があります。第一に、日本語翻訳に問題があったこと、第二に、前後の文脈に沿っていないこと、そして第三に、「よみ」に関する理解が不足していたこと、です。

**第一に、日本語翻訳に問題がありました。**

「みことばを語られた」と訳されていますが、ギリシア語「ケイルツ」は「宣言する」です。さばきを宣言する、勝利を宣言する、という意味で使われることばです。「みことばを」は翻訳上での付加であって、ギリシア語聖書にはありません。そこで、新改訳 2017 では、次のように訳し直されています。

I ペテロ 3 : 19 その霊においてキリストは、捕らわれている霊たちのところに行って宣言されました。

第二に、前後の文脈に沿っていませんでした。

「捕らわれている霊たち」とは、信仰を持たずに死んだ人々の霊魂では、ありません。次の20節に、誰なのか説明されています。

I ペテロ 3:20 **かつてノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに従わなかった霊たちです。**

「従わなかった人たち」ではなく、「従わなかった霊たち」です。これは、創世記 6:1~2 の「神の子たち」、すなわち天使です。天使には、聖なる天使と墮天使がいます。創世記 6:1~2 では、彼らは人間の娘たちと雑婚していますから、聖なる天使ではなく、墮天使を指します。

創世記 6:3、神は、この雑婚を警告し、「120年」という忍耐の期間を告げました。その間、ノアは箱舟を造って、洪水の裁きに備えました。

結果、洪水の裁きを通過して生き残った人類は、ノアとその家族だけでした。そして、人間の娘たちと雑婚した墮天使たちは、よみの中の「タータラス」という場所に落とされ、永遠に閉じ込められています。

彼らをそこに閉じ込めたのは、受肉前のイエス、すなわち、第二位格の子なる神でした。そのことは、ユダの手紙の中につきのようにあります。

ユダ 6 **またイエスは、自分の領域を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。**

波線部「暗闇の下」と訳されているのが、ギリシア語で「タータラス」です。

第三に、「よみ」に関する理解が不足していたことです。

「よみ」というと、【不信者の死者の霊魂の行先】、とだけ、考えていたので、【キリストがよみに下ったときに、そこにいる霊たちだから、不信者の霊魂である】となったわけです。

しかし、聖書が教える死後の世界「よみ」には、**4つの区画**があります。2つは人間の死者の霊魂が行く先、あとの2つは墮天使を閉じこめておく区画です。

人間の死者の霊魂が行く先は、信者の霊魂が入る区画と不信者の霊魂が入る区画に分かれます。信者の霊魂が入る区画は、「慰めの場所」あるいは「アブラハムのふところ」とも呼ばれます。不信者の霊魂が入る区画は、「苦しみ場所」とも呼ばれます（ルカ 16:19~31）。

信者の霊魂の行先を「パラダイス」（ルカ 23:43）と呼ぶことがあります。パラダイスは、キリストの復活・昇天までは、「よみ」の中の「慰めの場所」あるいは「アブラハムのふところ」と呼ばれる区画と同じです。しかし、後で詳しく述べますが、キリストの復活・昇天以降は、パラダイスは天に移されました。新約時代の信者が死ぬと、その霊魂はよみに下ることなく、天のパラダイスに行きます。

墮天使を閉じこめておく区画は、一時的に閉じ込めておく区画「アビス」と永遠に閉じ込めておく区画「タータラス」の2つです。

アビスは、日本語訳では「底知れぬ所」と訳されていますが、人に憑いた悪霊がイエスや弟子たちによって追い出されるとそこに閉じ込められました（ルカ 8：31）。大患難期においては、アビスから多くの悪霊が解放されて地上に現れ、神に頑なに反抗する人類を裁くために用いられます（黙示録 9：1～11、9：13～21）。

千年王国の時代には、サタンがアビスに千年間閉じ込められます。そして、千年が終わると、サタンはアビスから解放され、人類を惑わして最後の反乱を引き起こします（黙 20：1～3、7～10）

墮天使を閉じこめておく第二の区画「タータラス」は、創世記 6 章の墮天使たちを永遠に閉じ込めておくところです。「永遠に」とは、「よみ」がある限り、そこから解放されることがないということです。「よみ」は、最終的に、火の池に投げ込まれます（黙 20：14）。

「火の池」とは、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火」（マタイ 25：41）です。よみの中の区画「タータラス」に閉じ込められていた墮天使たちは、よみもろとも、火の池に投げ込まれます。そして、サタンも、ほかの墮天使もみな、火の池に投げ込まれます（黙 20：10）。

キリストが十字架で死んで、よみに下ったとき、キリストの霊魂が行った先は、4つの区画のうちの、信者の死者の霊魂が行く先、アブラハムのふところでした。4つの区画の間には大きな淵があって、お互いに行き来はできませんが、見ることはできます。そして、アブラハムのふところは、他の3つの区画を見下ろすような、位置関係にあります。

キリストは、そこに立って、タータラスを見下ろし、その墮天使たち、すなわち「**かつてノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに従わなかった霊たち**」に向って、宣言した、というのが、I ペテロ 3：19です。

キリストは、何を宣言なさったのでしょうか。墮天使たちに対する裁きの宣言であり、メシアとしての勝利の宣言であったと推測されます。

なぜなら、墮天使たちが「**自分の領域を守らずに自分のいるべき所を捨てた**」（ユダ 6）理由は、「人の娘たちが美しいのを見て」（創 6：2）ですが、墮天使たちのこの欲望を利用したのは、墮天使たちのリーダー、サタンです。

サタンの目的は、「女の子孫」（創 3：15）として生まれて来るメシアの到来を阻止することでした。墮天使と人間の女性が交わることで生まれてくる子ども「ネフィリム」は、確かに「勇士であり、名のある者たち」であり、能力や体力が優れていました。しかし、全員が男でした。次世代を産みだすことのできない子たちだったのです。

キリストは十字架の死において、勝利されました。よみに下ったのは、よみの苦しみを味わうためではありません。もしそうなら、十字架の上で「完了した」とは言われなかったはずです。キリストがよみに下ったのは、タータラスの中の墮天使たちに向ってメシアとしての勝利宣言をすること、そして「アブラハムのふところ」にいた旧約時代の信者たちのもとに行き、復活・昇天のときに、彼らを天に連れ帰るためでした（エペソ 3：8～9）。

## □ I コリ 15 : 29 について

第一コリントの 15 章でのテーマは、死者の復活です。

コリントの教会の中で、死者の復活はないと言う人たちが出た（I コリ 15 : 12）ので、使徒パウロはそのことを詳しく説明しています。その人たちは、不信者ではありません。キリストの復活は、信じていたようです。しかし、自分たち信者も、キリストと同様に復活するのかどうか、となると、疑いを持ち始めたようです。中には、「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」（I コリ 15 : 35）と、具体的な疑問をあげていた人もあるようです。

コリントの教会の信者たちが、このような疑問を提起してくれたおかげで、使徒パウロがこの手紙を書き、新約聖書となって、今、私たちが死者の復活について、明確に理解できることは本当に感謝です。

さて、今回の質問、「死後にも救いのチャンスはあるのか」との関係ですが、I コリ 15 章のテーマは、死者の復活であって、死後の救いでは、ありません。聖書を解釈するときには、その文脈から外れないことが大切です。

I コリ 15 : 29 の「死者のためにバプテスマを受ける」というのが、何を意味しているのか、結論から言うと、よくわからないのです。この手紙の中はもちろん、その他の新約聖書の巻の中でも、同じようなことを記した箇所が、全くないからです。

こういう不明確な箇所を根拠にして、基本的で重要な教理を立てることは、絶対にしてはなりません。死後にも救いがあると主張するのは、聖書の他の多くの、そして明確な教えに反します。聖書全体を矛盾なく説明できることが、基本的な教理の条件です。

I コリ 15 : 29 の意味は、文脈からある程度、推測できます。

次の 30 節、「なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか」。

この意味は、明確です。パウロは福音宣教をする中で、絶えず生命の危険がありました。32 節には「エペソで獣と戦った」ともあります。そのような死の危険をおかしてまでも福音宣教するのは、死んでも復活すると信じているからだ、と、30 節から 32 節で、パウロは語っています。死んだらおしまいなら、福音宣教などしないで、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから』ということになります」（I コリ 15 : 32）。

29 節の「死者のためのバプテスマ」というのは、正確に訳すと「死者の代理としての地位につくためのバプテスマ」です。

おそらく、コリントの教会では、洗礼（バプテスマ）を受けて新しく信仰の仲間に入る人には、教会の中で空席となっている何らかの地位につけたのでしょうか。（参照、チャールズ・ライリー、「ベーシック・セオロジー」、原書 332 ページ、日本語訳 441 ページ）

その地位が空席になっているのは、かつてその地位にあった信者が肉体の死を受けたからです。もしその人が死んでおしまいなら、「死者の代理として」という必要はありません。その人がまだ存在していると確信しているから、新しく信仰の仲間に入ってきた人をその

地位につけるのは、代理となるわけです。

信者が肉体では死んでも、霊魂は天のパラダイスにいて、生きている。そして死者の復活のときを待っている。その人はまだ存在している。死者の復活はあるのだ、というのが、I コリ 15 章 29 節のポイントです。

この解釈が決定的というわけではありませんが、少なくとも、ここでのテーマは死者の復活がある、ということであって、死後にも救いを受けるチャンスがあるのかどうかを論じているわけではないことは、明らかです。聖書には、死後に救いを受ける機会がまだあると教えている箇所は、どこにもありません。

#### □セカンド・チャンス論の背景

日本でセカンド・チャンス論が受け入れられやすいのは、つい何世代か前まで、キリスト教は邪教であると教えられてきた歴史的背景があると思います。「福音を聞かず、聖書も知らずに死んだ先祖が、救われないのは不公平だ。そういう人には、死後にも救われるチャンスがあってしかるべきである。神が、正しく愛あるお方であるというなら、そうでないとおかしい」といった反論が、よく聞かれます。

聖書は、何と言っているのでしょうか。

第一、人は、本来、天地万物の創造主なる神を知っています。にもかかわらず、その神を認めず、求めもしないで、自分の好き勝手に生きているのです。神でないものを神に仕立てます。それで権力を保ったり、金儲けをする人たちもいます。

第二、神に助けを求めるなら、神はどんなことをしてでも、その人のところに福音を届けます。求めるなら与えられます。福音も聞かず、聖書も知らずに死んだというのは、その人が求めなかったからであって、神の責任ではありません。

第三、求めて与えられ、救われたあとで、信者は、不思議に思います。どうして自分は求めることができたのだろうか。どうして神を信じることができたのであろうか。信者になってから、振り返ると、そこには、神の御手が働いていたのだと感じます。神が、何の良いところのない私を選び、神がこんな私を導いてくださったから、救われたのだ、と分かります。神の選びと導きは、信じたあとに、信者だけに分かることです。

この三つのことを理解するなら、セカンド・チャンスがあるはずだという誤解から解放されて、神がすべてを支配しておられるという平安をいただけるものと思います。